2024年3月10日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

弁護者・チャンピオンがいる

［ヨハネによる福音書16章5～11、25～33節］

「今わたしは、わたしをお遣わしになった方のもとに行こうとしているが、あなたがたはだれも、『どこへ行くのか』と尋ねない。むしろ、わたしがこれらのことを話したので、あなたがたの心は悲しみで満たされている。しかし、実を言うと、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところに送る。その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること、また、裁きについてとは、この世の支配者が断罪されることである。 」

「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである。わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」弟子たちは言った。「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」イエスはお答えになった。「今ようやく、信じるようになったのか。だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

[1]　 なぜ信仰が与えられているのか

時々私は、自分が信仰を与えられているということを不思議に思うことがあります。皆さんはそんなことをお感じになったことはないでしょうか？特にキリスト者がとても少数な日本の中で。もちろんキリスト者になる方が増えることは素晴らしいと思いますし、教会はじめ様々な伝道の働きが用いられるように祈りますが、けれど、信仰を持つということは、多数派とか少数派とかには寄らないですよね？ そうではなくて、クリスチャンの幸いというのは、横を見て一緒になるとか、他人を羨むようなことではなくて、むしろこの世の中の価値を遥かに凌駕しているそれまで知らなかった価値に捕えられ、生かされていることだと思います。それは、イエス様がおっしゃっておられるように「私たちの名が天に記されている」（ルカ10：20）ということではないでしょうか？このことを知った者は、とても自然に、この世の中の価値（観）にしがみつくことがなくなります。自由になります。「愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します」（ヨハネの手紙一4:18）と御言葉が語るように、ある意味、解き放たれた生き方、不屈な生き方が出来るようになるのだと思います。しかし、勘違いしてはいけないなと思うことは、それは、何か私たちが他の人よりも立派な人間になったという訳ではないということです。高い所から他者やこの世を断罪することではなく、むしろ本当に神様・イエス様に捕えられ、赦された者として、今共にこの世を生きている隣り人を愛していくことへと導かれていくのだと思います。そして、それはしばしば自分が傷つく道も通ることもあるということです。必ずしも楽な道ではないと思います。イエス様ご自身もそうであったように。しかし、そのイエス様が、私たちに言わば遺言のようにして素晴らしい言葉を残して下さいました。それがヨハネ福音書16章の最後の言葉だと思います。―「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

[2]　勝利者イエス

　この言葉を語られた時、イエス様が置かれていた状況というのは、とても緊迫していたものでした。もう十字架の死というものをはっきり見据えています。28節では主イエスは「わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く」と言われました。これは神の独り子が、この世に送られてきたその使命を終え、父なる神のもとに帰って行くということでもありますが、それはご自分が死ぬ（殺される）という道を経てということですよね。イエス様ご自身の心の中は様々な思いが交錯していたに違いないと思うのです。しかし、この時に至っても主の心は、どこまでも弟子たち、弱い弟子たちに対する慈しみで満ちていたと思います。「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである」と言われた通りです。そして、あなたがたには苦難があるに違いないが、勇気を得なさい、と言うのです。なぜなら、わたしイエスは「既に世に勝っている」のだから、と言われるのですね。イエス様は、これから十字架に懸かられる訳ですが、それは敗北のように見えるが、そうではないのだ、実はそのことによって、わたしはあなた方のために勝利者となるのだ、とおっしゃっているのです。

最近このことに関連して、ああ、そうなんだ、と教えられたことがありました。ある方が説教の中で紹介して下さっていたことですが、小説家の大江健三郎氏の『新年の挨拶』というエッセー集の中でこんなことが書かれてあるそうです。題は『チャンピオンの定義』です。大江さんのお兄さんが、大江さんが高校に入った時にオックスフォード英和辞典を贈ったというのですね。大江さんは家族で夕食を食べる時間を忘れてその辞書に没入して、遅れて夕食に合流したそうです。お兄さんが「何か面白い言葉でもみつけたの？」と聞くと、大江さんは「単語と言うより、その説明で面白いと思うものが幾つもあった」と言うので「例えば、どういう言葉なの？」とお兄さんが聞いたんですね。そうしたら大江さんは「「チャンピオン」という単語の説明の中に、“ある人のために代わりに戦ってくれる人”とか“ある主義主張を守るために代わって議論する人”とあってしっくりした」と言うのです。それから40年も経った時、お兄さんはガンで亡くなったのですが、後で分ったことですが、お兄さんが亡くなる少し前に病室を訪ねた人がいて、その人が不躾に「あなたは来世のことや死後のことで何か備えは出来ていますか？」と尋ねたというのです。その時お兄さんは「そのようなことは東京にいる弟に任せているから、弟に尋ねてくれ。彼は僕のチャンオピオンだから」と言ったというのですね。大江さんは昔の高校生の時のことを忘れていたそうですが、お兄さんの方はずっと忘れていなかったということに驚かされたという話です。

　それにしても英語の「チャンピオン」が、普通の「勝利者」という意味だけでなく、“ある人のために代わりに戦ってくれる人”という発見があって気持ちが昂ぶったというのは面白いと思いました。つまり、「チャンピオン」というのは、その人自身が褒め称えられるというよりも、誰かのための代理者、或は身代わりとなって戦いを戦う人ということでもあるんですね。実際、英語の辞書には“貧しい者、虐げられた者の擁護者”ともあるようです。また調べてみましたら、最近の実業界などでも、自ら企画発案して**先頭に立って責任を取ろうとする人**のことを「チャンピオン」と呼ぶことも少なくないそうです。

こう考えてくると、このヨハネ福音書16章のイエス様の言葉は、それにとても当てはまるなぁと思ったんです。読んで頂いた部分16章6節以下にこうありました。イエス様の、弟子たちに対する告別の言葉の一部です。―「わたしがこれらのことを話したので、あなたがたの心は悲しみで満たされている。しかし、実を言うと、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところに送る。」―そうです、この「弁護者」こそが、「勝利者」つまり「チャンピオン」の意味を現しています。「弁護者」（弁護人）という存在は、訴えられた者の右側に立ち、その者を擁護するんです。彼の人生は、この強い弁護者にかかっていると言って良い訳ですね。私たちは恐らく生きている間この肉の目で、イエス様を見ることは出来ないでしょう。しかし、イエス様がいらっしゃらない訳じゃない、人間の力で殺されて終りという訳じゃない、むしろ今、キリストの霊・聖霊が、私たちのまことの弁護者として私たちの先頭に立って、神様とつながっている道（葡萄の幹とその枝との関係）をしっかり確保して下さっているのです！主ご自身が私たちのために、私たちに代わって私たちが戦わねばならないサタンとの戦いを戦って下さったのです！そして、勝利して下さった。その決定的な場面を、私たちは再来週のヨハネ19章の所でまた見ることになりますが、けれども、もう今日の所でイエス様はもう「わたしは既に世に勝った」と、宣言して下さっているのです。そこにはイエス様の愛の覚悟もあるのだと思います。

[3] 主があなたたちのために戦われる

私たちの信仰生活というのは、何か悲壮なもの、私たちが最前線に立って戦うようなものではないと思います。むしろ私たちが「平安を得るため」だと主は言われます。実はこれは、イスラエルの共同体が、出エジプト記にある、あの葦の海の中を渡る時も同じなのです。出エジプト14章13～14節にこう記されています。「モーセは民に答えた。「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい。あなたたちは今日、エジプト人を見ているが、もう二度と、永久に彼らを見ることはない。主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。」―私はこの言葉がとても好きです。「主があなたたちのために戦われる。」 “The LOAD will fight fou you”. あなたはただ落ち着いて、あなた方のために行われる主の救いを見ていれば良い、静かにしていれば良いと。

　確かに主に救われた者、主に捕らえられた者は、この神様にだけ仕えて行くという戦いはあると思います。しかしそれは、明確なゴールを目指して歩む喜びではないでしょうか？私たちの罪はイエス様によってもう既に十字架の上で全く肩代わりされてしまって、私たちの行きつく先・御国はもう約束されています！真のチャンピオンが、真の勝利者が道を開いて下さいました！そうであるなら、自由なのびやかな心をもって、許される時まで、ただ神様に従って歩んでゆけばよい、単純に、光が招く道を歩んでゆきたいと思います。お祈り致します。

　主イエス様、あなたの御言葉を感謝します。私たちは自分を見たり、周りの状況を見ると安心できないことばかりに囲まれています。しかしあなたはおっしゃって下さいました。「あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」と。勝利者イエス様、どうか私たちを離れないでください。私たちもあなたに従って歩んで行きたいです。聖霊なる主よ、私たちに一歩一歩進んでゆく力をお与え下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。